第４回 福祉用具専門相談員実力ランキングテスト［問題用紙］

福祉用具

（設問数：４４　　２２０点満点）

第４回 福祉用具専門相談員実力ランキングテスト［問題用紙］

福祉用具

（設問数：４４　　２２０点満点）

1．ベッド関連

以下の設問では特に記述がない場合は、介護用ベッドをベッドと表現している。

【設問1】メーカーの相違による特徴

次のベッドの構造に関する記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① パラマウントベッドの楽匠Ｓのボトム（底板）構造は３枚のボトム（体幹部、大腿部、下腿部）と、下腿部と大腿部の間に伸縮する部材（キューマラインと呼称している）を挟んだ構造である。

② シーホネンスの和夢シリーズのベッドは、ボトムは体幹部、臀部、大腿部、下腿部の４枚のボトムで構成され、大腿部ボトムが短めであり、各ボトムはプラスティック成形された部材で構成されている。

③ フランスベッドのヒューマンケアベッドは体幹部が２枚に分割され、全体で５枚のボトムから構成されている。サイドフレームがないため、介助者がより近づきやすく、車いすとベッドの間に隙間を生じない。ボトムの素材は鋼線を溶接したものである。

④ ランダルベッドのリライフベッドは、現在のJISに対応した商品であり、手元スイッチがワイヤレスリモコンになっているとともに、ボトムは鋼線を溶接した構造である。

⑤ モルテンのインプレスは２モータのベッドであり、大腿部長さを任意に調節でき、現在のJISに対応している。

【設問2】背の昇降に伴う特性

ベッドの背上げ・膝上げ機能などに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① ベッド上で背上げ座位をとるためにはまず寝ている位置が問題になる。一般的に利用者の股関節の位置と、ベッドの体幹部ボトムと大腿部ボトムの回転軸位置を仰臥位で合わせると言われるが、この位置より数 cm、頭よりに寝ている方が体幹部の圧迫は軽減される。

② ベッドの背上げをするときや背下げをするときには、ベッドマットレスと身体の間にずれが生じる。自分で身体を動かせない人の場合には、背を上げるときも背を下げるときもこのずれを解放するための介助動作が必要になる。背を上げるときにはいわゆる「背抜き介助」といわれる圧迫の解放動作だけではこのずれを除去することはできない。

③ ベッドの背を下げるときのずれを解放する介助動作は、利用者の首の下に手を入れて軽く持ち上げながらベッドの背を下げればよい。

④ ベッドの背を下げるとき、人によってはベッドの背が平らになる前に、平らになったように感じてしまう人がいる。このような人の場合には連続してベッドの背を下げ続けると、頭が水平よりも下がっているように感じてしまう。

⑤ ベッド上で背上げ座位をとるためにベッドの背を上げるときには、まず膝を上げてから背を上げるか、膝上げと背上げを同時に行うことが望ましい。これは背上げに伴う腹部の圧迫を軽減させるためである。

【設問3】サイドレール

ベッドの柵（サイドレール）に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（すべて正解で5点）

① ベッド全体の長さと同じ長さの柵で、全体が水平に昇降できる柵がある。この柵は上げたときベッド全体を囲んでしまう。したがって、両側に利用すると拘束される状態になってしまうから、片側にしか利用できない。

② ベッド全体の長さに対して、2 分割して使用する柵は、二つの間の隙間が一定の間隔以下か一定の間隔以上になるものでなければ JIS に適合しない。

③ 差し込んだだけで使用する柵は寝返りのときに手がかりとして利用することはできず、身体や布団の落下防止目的に使用できるだけである。

④ ベッド用グリップ（介助バー）は、立ち上がり補助や端座位を安定させるために利用するが、ベッドフレームにネジなどでしっかり固定できるものでなければならない。

⑤ ベッド用グリップ（介助バー）も含めて、サイドレール類はベッドと同一のメーカーの商品を使用しなければならない。A 社のベッドに B 社のサイドレールは使用してはならない。

【設問4】昇降機構

次のベッドの昇降機能に関する記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 昇降機構の構造から、昇降軌跡は円弧を描くものと垂直に昇降するものがある。垂直に昇降する機種はベッド下に広くスペースが空き、掃除などが容易である。

② 垂直昇降する機種は構造上キャスターをつけることができないため、ベッド脚を固定して利用することになる。

③ 円弧昇降する機種は、その軌跡の特徴から、一番下げた位置から、頭側、足側両方に数 cm（約 5 ～ 10cm）程度の余裕（隙間）ができるように配置する必要がある。

④ 円弧昇降するベッドは端座位でベッドを昇降すると、身体が左右に移動するため、体幹バランスを崩しやすく、足を自分で動かせない人には不向きである。

⑤ 現在我が国で製造販売されているベッドでは、垂直昇降する機種の方が円弧昇降する機種よりも低床にすることができる。

【設問5】ベッドの使い方

ベッドの使い方に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（すべて正解で5点）

① 介助者がベッド上に片膝をつくような動作は、ベッドの強度の問題から、ほとんどのメーカーの取扱説明書では禁止されている。

② ベッドの膝が上がっている状態で、介助者がベッドの膝部分に腰を下ろして介助することは、ベッドの取扱説明書では禁止されていることが多い。

③ ベッドに寝ることができる人の体重には制限があり、ベッドメーカーによって異なっている。この重量は比較的大きな数値であるので、介助者が添い寝をする（二人で寝る）ことも可能であることが多い。

④ ベッドの重量が重く、これに人が寝るので全体の重量はかなり大きくなる。このため、畳の部屋にベッドを設置するときは脚の下に比較的大きな面積を持った脚座などを敷いて、畳の沈み込みを小さくする工夫が必要である。

⑤ ベッドにキャスターをつける場合には座位移乗などでベッドの固定性が必要な場合には 4 輪ともにロックがかけられる方が適している。

【設問6】起きあがり・立ち上がり動作とベッドの機能

ベッドの機能と動作との関連について、次の記述のうち正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 起きあがって端座位になる場合、マットレス幅が広めだと腰が深めの端座位になる。立ち上がるためにはお尻を前に出さないと立ち上がりにくいから、臥位から立ち上がるまでの動作だけを考えれば、マットレス幅は狭い目の方が動作は容易になることが多い。

② 平らなベッドから自力で起きあがりにくくなったら、ベッドの背上げ機能を利用する。身体機能の低下に応じて背上げ角度を調節するのが原則だが、ケアプランによっては背上げ角度を身体機能に比して大きくし、楽をして起きあがるということも大切である。

③ 自分で起きあがるときにはベッドの背を上げている場合でも平らな場合でも、側臥位になってから起きあがると容易である。

④ 背上げ角度を大きくして起きあがる場合には、仰臥位で背だけを上げると身体が足側に滑って角度を大きくしても楽にならないことがある。このような場合には側臥位になってからベッドの背を上げれば身体の足側への滑りは防止され、容易に起きあがることができることが多い。

⑤ 立ち上がるときにはベッドの高さを高くした方が立ち上がりやすい。しかし、ベッドに戻るときは高すぎるベッドは戻りにくいので、立ち上がりに高さが必要な場合は昇降機能が付いたベッドにし、ベッドから出るときと戻るときとで高さを調節する。

【設問7】マットレス

ベッドのマットレスに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① ベッドの幅が各メーカーによって異なるため、マットレスはベッドメーカーから販売されているマットレスを使用する必要がある。

② 繊維系のマットレスは消毒も容易であるが、ウレタン系のマットレスは洗濯・消毒が困難である。失禁などの問題からウレタン系のマットレスは原則販売が中心であり、レンタルしている事業者は少ない。

③ 一般商品のベッド（介護用ベッドではない）のマットレスはスプリングマットレスが多く、スプリングマットレスは寝心地がよい。介護用ベッドでスプリングマットレスの利用が少ないのは、背上げや膝上げでマットレスがたわむ必要があるが、スプリングマットレスはたわみにくいことが理由のひとつになっている。

④ 介護用ベッドの褥瘡対応ではないマットレスはほとんどが厚さ数 cm である。薄くする理由の一つはベッドの低床化が求められているからである。

⑤ 片面が硬い目、片面が柔らかめというリバーシブルのマットレスが各社から販売・レンタルされている。この柔らかめの方はほとんどのメーカーで、褥瘡対応のマットレスである。

【設問8】ベッドサイドテーブル

次のベッドサイドテーブルに関する記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（すべて正解で5点）

① ベッドのサイドレールにまたがせて利用するテーブルは、高さを調節することができないので、介護保険ではベッド付属品としての給付は認められていない。このため、多くのレンタル事業者はベッドの一部として、ベッドのレンタル価格に含めてレンタルしている。

② コの字型の片持ちのテーブルは脚にキャスターがついており、ベッドの背を上げて使用する場合にはベッドの下にベース部分を差し込む。したがって、低床型のベッドの中にはハイトスペーサーを利用しないと、このタイプのテーブルを利用できない機種がある。

③ コの字型のテーブルは端座位テーブルとしても利用できる。食事をするときなどは可能であれば（座位バランスがよいなど）、背上げ座位ではなく、端座位で利用することを勧める。

④ コの字型のテーブルは片持ちではあるが、強度を考えて設計されており、テレビなどの重量物を端にのせても問題はない。

⑤ 門型のテーブルは高さ調節もでき、キャスターがついているので移動も可能であり、ベッド下にスペースがなくとも利用することができる。

2.床ずれ防止用具関連

【設問9】エアマットレス

エアマットレスに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 仙骨部に褥瘡ができたというので、何はともあれ、エアマットレスを勧めた。

② エアマットレスの空気圧は体重に合わせて調節するが、骨突出がある場合など褥瘡のリスクが高い場合には若干高めに設定する。

③ ベッドの背上げ座位をとるときには臀部に体幹部の体重がかかるため、底付きする可能性が高くなる。エアマットレスによってはこの部分の圧を高くする機能を持ったものがある。

④ エアマットレス上では身体が沈み込んで身体を動かしにくくなる。エアマットレス上で身体を動かすためには一時的にエアマットレスの空気圧を高めるとよい。

⑤ エアマットレスの厚さはオーバーレイとして使用する薄いものから、リプレイスメントとして使用する厚いものまであるが、一般論としてリスクが高いほど厚いものを選択する。

【設問10】床ずれ防止用具－マットレス

褥瘡とマットレスとの関係について、次の記述のうち正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 体動があるのに、肩甲骨部に褥瘡ができたという。ベッドの背上げ・背下げ時のケアに起因して褥瘡を形成したという可能性は十分に考えられる。

② エアマットレスを使用しているにもかかわらず、外踝部に褥瘡を作ってしまったという。股関節が外旋していたので大腿部にクッションを当てて下肢が正中位を維持するようにしたが、今度は踵部が心配なので、エアマットレスを足部が下がるタイプに変更した。

③ 褥瘡のリスクが高い人だが、エアマットレスで船酔いのような気分になるという。静止型の褥瘡対応マットレスではエアマットレスほどの圧分散性は期待できないので、我慢してエアマットレスを使用するよう勧めた。

④ 褥瘡のリスクが高い人だが、低反発ウレタンを利用したオーバーレイタイプのマットレスを使用している。蒸れて暑いというので、エアマットレスに交換することを勧めた。

⑤ 寝返りが自分でできる人であるにもかかわらず、寝具で過ごす時間が比較的長い。座骨部に褥瘡を形成したという。念のために静止型の褥瘡対応マットレスを勧めた。

【設問11】褥瘡の原因

褥瘡の形成に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 褥瘡を作る原因の一つに湿潤がある。したがって、褥瘡を形成しやすい部分に関しては可能であれば換気を促しやすい環境を作ることも大切である。

② 褥瘡を作る大きな要因の一つは圧力である。皮膚にかかる圧力の大きさが問題になるだけではなく、その持続時間や頻度も大きな影響を与える。

③ 皮膚に圧力が加わることによって、圧縮応力、引っ張り応力、せん断応力が生じ、これらによって皮膚組織などが破壊されると考えられる。このうち、褥瘡の原因になるのは主としてせん断応力の大きさである。

④ 接触圧力を小さくすれば褥瘡の予防になる。圧力を小さくするためには接触面積を小さくすることと、接触面に加わる力を小さくすることの二つの方法がある。

⑤ 接触面に加わる力を小さくする手段の一つが、接触面の下に弾性要素の素材を利用することである。

【設問12】褥瘡の原因－２

褥瘡の形成に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（すべて正解で5点）

① 粘性要素には静的に加わる力を小さくする機能はない。したがって、低反発ウレタンだけの薄い車いすクッションでは褥瘡予防効果が期待できないことがしばしばある。

② エアマットレスやウレタン系の褥瘡対応マットレスは弾性要素とともに粘性要素を適切に持つことによって、圧力を小さくしている。

③ 褥瘡を作る要因の一つに骨突出がある。これを防ぐ一つの手段は筋を太くすること、すなわち、筋力をつけることであるから、仙骨部などの骨突出には殿筋の筋力増強がもっとも効果的である。

④ 皮膚に対する化学的な攻撃も褥瘡の原因になる。このため、便失禁は褥瘡形成の原因の一つである。

⑤ 皮膚に加わるずれ力は容易に褥瘡を形成する。ズボンを持ち上げる移乗介助は殿裂部分の褥瘡形成の原因の一つである。

3. 車いす関連

ここでは「標準型車いす」には、調節できる車いすやいわゆるモジュラー型車いすも含めて議論する。調節できない車いすをいう場合は「固定型車いす」と表記する。

標準型車いすのうち、後輪径が小さく手こぎができない車いすを「介助用車いす」と表記する。後輪径が大きく、手こぎができる車いすは介助用ブレーキがついていても「自走用」と表記する。

ティルト、リクライニング、レッグエレベーション機能などを有する車いすは「姿勢調節型車いす」と表記する。

電動車いすは大きく、「ハンドル型(三輪、四輪)」、「ジョイスティック型」、「介助用」、「その他」に分けて議論する。

【設問13】構造

標準型の車いすの構造に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。(すべて正解で5点)

① 後輪径は自走用では 20、22、24 インチが多く使用され、介助用では 6、8、10 インチが主として利用される。

② 座幅を調節できる車いすも少数あるが、多くの場合座幅は選択する必要がある。

③ バックサポート角度を調節できる車いすも多くの事業者がレンタルしている。

④ 介助者用ブレーキは車軸に内蔵されたドラムブレーキが速度調整もでき、最適である。タイヤにレバーを押しつけるタイプの介助者用ブレーキは、速度調節がしにくく、ブレーキがゆるみやすい。

⑤ 車いすを固定するためのブレーキロックは、押してブレーキが利く押しがけタイプと引いてブレーキがかかる引きがけタイプがある。自走で走行中に速度調節するためには押しがけタイプを選ぶ。

【設問14】寸法の定義

車いすの採寸に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 前座高とは床から、使用しているクッションの前端上面までの距離をいう。

② 座角とは鉛直とシートパイプがなす角をいうが、便宜的に前座高と後座高の差で表現することもある。

③ バックサポート角度とは水平面とバックサポートパイプがなす角をいう。

④ 座の奥行きとは、座シートの奥行きをいう。

⑤ 座幅とはシートパイプの内ー内でも、サイドプレートの内ー内でも表現される。この両者には差があることが多いので、座幅の選択時には注意が必要である。

【設問15】手こぎ

車いすを両手こぎするときの適合に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 駆動輪（後輪）軸位置は前方の方がこぎやすくなる。これはキャスター輪にかかる荷重が大きくなるからである。

② バックサポート角度は大きい方がこぎやすく、調節できる車いすの場合は 95 ～ 100 度程度に設定する。

③ ハンドリムは摩擦係数が同じなら、剛性が高い方が軽い力でこげる。

④ 空気入りタイヤとソリッドタイヤを比較すると、車輪幅が同じ場合、走行路面が畳のような場合は空気入りタイヤの方が、フローリングされているような床の場合はソリッドタイヤの方が軽く動く。

⑤ 座幅が狭い方がこぎやすいと言われる。しかし、正確には左右のハンドリムの距離が短い方がこぎやすい。

【設問16】足こぎ

車いすを足こぎするときの適合に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 両足こぎをする場合には、前座高は下腿長より短い方がこぎやすい。

② 両手両足こぎをする場合には、座面高さは下腿長より少し高い方がこぎやすい。

③ 片手片足こぎをする場合には、患側をフットプレートに乗せるため、原則として両足こぎよりは座面高さが高くなる。

④ 足こぎをする場合の座面角度は水平か場合によっては前下がりになるように調整するが、前下がりの場合は座骨の前滑りを止めるクッションが必要になる。

⑤ 足こぎをする場合のバックサポート角度は可能な範囲で後ろに倒し、骨盤の動きを制限しないようにする。

【設問17】介助用車いす

介助で使用する車いすの適合に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（すべて正解で5点）

① 屋内では両手こぎ、屋外では介助移動というような場合の車いすでは、介助者用ブレーキは必ず必要である。

② 円背があり、骨盤が後傾して可動域制限がある人の介助用車いすでは、バックサポート角度が調節できないと深く着座できず、いわゆるずっこけ姿勢になってしまう。

③ 上記のような場合、バックサポート角度は骨盤の傾きに合わせるが、座面角度も前を上げ気味に調整した方が安定して座れることが多い。

④ 上記のような人の場合には、骨盤が後傾していることから座骨も突出せず、クッションでアンカーサポートを作っても効果が少ない。

⑤ 散歩など屋外で使用する場合には後輪径の大きい車いすの方が乗り心地がよく、介助者も軽く動かせる。

【設問18】クッション

クッションに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（すべて正解で5点）

① 座骨の前滑りを止めるために、クッションにアンカーサポートの機能を準備する場合、座骨を支持する位置は座面の前側１／３から１／２程度の位置である。

② エアセルタイプのクッションは座圧の分散性能が高いことから褥瘡のリスクが高い場合によく使用される。しかしながら、１バルブのクッションは座位バランスを崩しやすいのが欠点である。この欠点を改善するためには、各セルがすべて独立して調整できるタイプが市販されているから、これを利用するとよい。

③ 座った姿勢で、骨盤が左右に傾くことによって体幹が傾いてしまうような場合には、臀部の厚みを左右で調整できるタイプのクッションを利用し、骨盤を平行にすることによって体幹の傾きを防止できる場合がある。

④ クッションと車いす座面はしっかり固定されることが望ましく、面ファスナーなどでクッションが前方にずれないように配慮する。クッションの上に滑り止めを敷くことも効果的である。

⑤ 防水布でカバーされているクッションは蒸れやすいので褥瘡のリスクが高い人には不向きである。

【設問19】姿勢調節型車いす

姿勢調節型車いすに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 標準型車いすを調節しても姿勢が崩れてしまうような場合には、リクライニング機能だけでは不十分であり、ティルト機能が必ず必要になる。

② 座っていて体幹が左右に傾いてしまう人の場合には、バックサポートに体幹の側方支持機能が必要になる。この支持はまず肩甲骨周辺（体幹の上部）を側方から支持することを考え、支持が不足する場合には順次腰部・骨盤部など下方を支持する。

③ ティルト、リクライニング、レッグエレベーション機能を有する車いすで、起きている姿勢から寝かせた姿勢に移る場合には、まず足を上げて（レッグエレベーション）、身体が前に滑らないようにし、それから座面を傾け（ティルト）、最後にバックサポートを倒す（リクライニング）。

④ 姿勢調節型車いすで、座面角度やバックサポート角度、ヘッドサポート位置や角度が随意に調節できるのは、その日の状態に合わせてこれらを調節し、可能な限り同じ姿勢を長時間維持させるためである。

⑤ 姿勢調節型車いすも座幅を身体の大きさに合わせ、座の奥行きを調節し、フットプレートの高さや角度など、標準型車いすと同様に身体に合わせることが必要である。

【設問20】電動車いすーハンドル型

ハンドル型電動車いすに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① この電動車いすは歩行ができないと利用できない。また、両上肢の機能が十分でないと利用できない。

② この電動車いすは道路交通法でいう軽車両に相当する。その上、電動で駆動されることから、道路交通法では歩道のある道路でも歩道を走行することはできない。

③ 三輪車と四輪車があるが、安定性から最近は四輪車が多く利用される。しかし、狭い場所で移動するための小回り性能などは三輪車の方が優れている。

④ このタイプの車いすは、列車、電車、バスなどの公共交通機関はすべて利用できない。公共交通機関を利用する場合にはジョイスティックタイプの電動車いすにする必要がある。

⑤ 介護保険でレンタルする場合には、専門家による判定が必要になる。これは運転能力だけでなく、認知能力も検査する。

【設問21】ジョイスティックタイプの電動車いすなど

電動車いすに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 標準型車いすに駆動装置を装着した、いわゆる簡易型電動車いすは屋外で電動駆動するには剛性が不足する。したがって、屋内使用を原則とし、屋外で使用するときはきわめて近距離か、路面状況が滑らかな平坦路に限定される。

② 簡易型電動車いすの多くは介助者用のコントローラを付加することによって、介助用電動車いすとして使用できる。介助用電動車いすは屋外において、上り坂で有効であることはもちろんだが、急な下り坂を走行するときにもっともその効果を発揮する。

③ ジョイスティックタイプの電動車いすは障害者用の車いすであり、介護保険は利用できない。高齢者でこのタイプの電動車いすを利用する場合は障害の制度で給付される。

④ ジョイスティックタイプの車いすとハンドル型電動車いすの最大の相違はその回転半径であり、ジョイスティックタイプの場合には左右の駆動輪を逆転させることができるから回転半径が小さくなる。ハンドル型ではこれができず、片側を軸に反対側を駆動させたときに最小回転半径になる。

⑤ ジョイスティックタイプの電動車いすは１本のバー（ジョイスティック）を傾ける方向と傾ける角度で操舵とアクセル操作を行っている。ハンドル型は操舵をハンドルで行い、アクセル操作を別なレバーで行う。

4. 歩行補助用具

【設問22】杖類

杖類に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。
（すべて正解で5点）

① Ｔ字杖（１本杖）、ロフストランドクラッチ、多脚杖などの長さは、床から尺骨茎状突起までの距離、床から大転子までの距離、足の外側 15 ～ 20cm で肘を 30 度曲げたときの長さ、などの合わせ方があるが、いずれの方法で採寸しても同じ長さになるので、どれか一つを知っていればよい。

② ロフストランドクラッチとは前腕部をカフで支持し、杖のグリップを握って体重支持などを行うものである。前腕部カフは手関節から肘関節まで前腕部全体を覆うように支持する。

③ 杖類は歩行能力に応じて使い分ける。身体機能の程度に応じて、まず１本杖、歩行能力が低下したら、多脚杖、さらに低下したらロフストランドクラッチ、さらに低下したら歩行器類などというように、身体機能（歩行能力）の程度に応じて階層的に使い分けるものである。

④ １本杖などの片手で利用する杖類は下肢機能に左右差がある場合には健側に杖を持つ。

⑤ 松葉杖は別名、腋下支持クラッチといわれるように、両上肢と腋の下で体重を支持する。

【設問23】歩行器類

歩行器類に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 歩行器には交互型歩行器と固定型歩行器がある。ともに両手でもって、持ち上げて歩行器を移動させるが、固定型歩行器には、脚の下に小さな車輪をつけて、持ち上げなくとも滑らせて移動させるタイプがある。この車輪は体重をかけると移動してしまうため、このタイプの固定型歩行器を利用できる人はわずかな歩行補助機能が必要な人に限られる。

② 固定型歩行器の全脚型（車輪をまったく利用しないタイプ）は必ず持ち上げて移動させるので、屋内の多少の段差は問題にならない。したがって、この歩行器を使用する場合には家屋内の段差に配慮しなくともよいという利点がある。

③ 交互型歩行器にしても、固定型歩行器にしても、両上肢を利用して歩行を補助するため、原則として片マヒの人は利用できない。

④ 歩行が不安定になってきたら、フレームの高さを少し下げ、若干前傾姿勢になると支持基底面が広がって安定する。

⑤ 歩行器類の取っ手の高さは、１本杖の高さより若干（2 ～ 3cm）低めに設定する。

【設問24】歩行車－１

次の歩行車に関する記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 介護保険が利用できる、いすつき歩行車は支持基底面内に体重の多くが入るものでなければならない。このため、俗にシルバーカーといわれる、ショッピングカートにいすをつけたようなタイプの多くは介護保険適用外であるが、取っ手を支持基底面内にして介護保険が利用できるタイプも市販されている。

② 取っ手の高さが適切な高さより低いと、身体をフレーム枠内に入れられず、前傾姿勢になってしまう。

③ パーキンソン症状を呈する人が使用する場合、歩行車を押しすぎて、勝手に前に移動しがちになる。このような場合には車輪に抵抗を加えて移動を制限する機種を選定するとよい。

④ 多くの機種が座るための座面がついているが、これが跳ね上げられないと、歩行時に前傾姿勢になりがちである。跳ね上げられない座面の場合は前傾姿勢にならないよう、歩き方に注意が必要である。

⑤ いすつき歩行車は車輪が比較的大きいので、屋内にある廊下と部屋の段差程度は越えられることが多い。

【設問25】歩行車－２

次の歩行車に関する記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① シルバーカーと呼ばれる機種は、車輪が小さいので、車輪をロックしても床（道路）面との間で滑ってしまう。いすつき歩行車なら、しっかり固定され、立ち座りに不安は感じない。

② いすつき歩行車のブレーキは自転車のブレーキのように握ることによって速度調節ができ、押し下げることによって車輪ロックがかかるものが多い。

③ いすつき歩行車はバスケットをつけられるので、歩行に補助が必要な人で買い物など荷物を運びたい場合にはとても便利である。屋内で移用する場合にはトレイが付属品として販売されているものもある。

④ いすつき歩行車を日本家屋内で使用する場合には、全体の幅が狭いものなら廊下で 180 度旋回することができる。

⑤ いすつき歩行車の多くは縦に折り畳むが、車いすのように横に折り畳むタイプもある。この横に折り畳むタイプはいすを跳ね上げることができない。

5. 手すり

【設問26】住宅改修の手すり

住宅改修による手すりに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① トイレにつけるＬ型手すりは一般的には縦手すりが立ち上がりの補助や立位の維持に、横手すりが座位の安定に利用される。このため、縦手すりの一般的な位置は便座の先端と同じ程度の位置である。

② 浴室壁に付けるＬ型手すりは、縦手すりの部分は一般的には浴槽からの立ち上がりに利用される。したがって、浴槽の内側の縁から前方 300mm 程度の位置が標準的な位置である。

③ 階段に設置する手すりの標準的な高さは、段鼻において、杖の高さ＋階段１段の高さである。もちろん、利用者の状況に応じて微調整が必要である。

④ 片マヒの人の場合には、行きと帰りで手すりの必要な位置が異なる。したがって、廊下の片側だけに移動のための横手すりを設置することは意味がないことが多い。同様に浴室内に設置する移動のための手すりも行きと帰りの動作をきちんと確認して、対策を立てる必要がある。

⑤ 玄関のたたきの段差を手すりで越える場合には縦手すりで対応できるのは 200mm 位の段差までであり、400mm も段差がある場合には縦手すりだけで越えることは難しい。

【設問27】レンタルの手すり

レンタル対応の手すりに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① ベッドからの立ち上がりに補助が必要だという。ベッドから立ち上がったら、頭側に歩いて移動する動線が必要であり、ベッドの移動側にスペースがあまりないという。ベッド用グリップでは動線をじゃまするとと考えたので、床と天井の間で突っ張って固定する手すりをレンタルした（固定できたので）。

② 歩行が不安定な上に（多脚杖を利用している）、畳から立ち上がりにくいという。ベッドがいやで、普段畳に布団で寝ている。床置きの手すりをレンタルしたが、布団には敷き込まず、布団から離れた位置に置いて立ち上がれる機種を選定した。

③ ベッドから部屋を出るまでの動線に手すりが必要だという。フローリングされている部屋だが、壁までの距離が遠く、壁に手すりを付けても手が届かない。60cm ほどの手すりがあれば、安定して歩行できることがわかったので、床置きの移動用の手すりをレンタルした。

④ トイレで座ったときや立ち座りに便座の両横に手すりが欲しいという。賃貸の家なので、建物にねじなどで固定できない。便器に固定する手すりは立ち座りなどで力を加えると危険なので、ポータブルトイレで排泄するよう勧めた。

⑤ 屋内は座位移動しているが、玄関で車いすに移乗するときに横手すりが欲しいという。家屋の構造上、適切な位置に手すりを固定できない。天井突っ張り型の手すりを２本利用し、間に横手すりを設置したが、介護保険では１本の天井突っ張り型の手すりしか適用されない。したがって、残りの部分は全額自己負担となる。

6. 移乗

【設問28】立位移乗

立位移乗に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 立位を補助する用具のうち、電動で立たせるタイプ（スタンディング・エイドなどといわれる。たとえばモーリフトのクィックレーザー）は、膝を押さえて立たせることから、膝関節に疾患がある場合や膝関節に拘縮などがある場合には利用できないことが多い。

② この用具（スタンディングエイド）は股関節の伸展筋群がマヒしていると利用できないことが多く、吊り上げるタイプのリフトと比較して適応となる人が少ない。

③ 人を立たせる場合には、利用者の体幹を前傾させ、利用者の重心位置を基底面内に移動させることが必要である。したがって、介助者が利用者の脇の下に手を入れ、介助者が利用者に近づいて、脇の下を上方向に引き上げるような立位介助は、してはならない立位介助の代表である。

④ ベッド端座位から立ち上がりにくくなったら、ベッド用グリップ（介助バー）を利用し、グリップの前方を握らせて引くようにしながら立ち上がると少し容易になる。

⑤ 立位移乗をするには、軽い介助などで立ち上がることができるだけでなく、立位を安定的に維持するとともに、回転し（足の踏み替えをし）、静かに着座できなければならない。これら一連の介助を容易に行うために、ターンテーブルや、ヒップベルトなどが利用される。

【設問29】座位移乗－1

ベッドと車いすの間で、トランスファーボードを利用した座位による移乗に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① ベッドから車いすへ移乗するときは、ベッドの上面を車いす座面より10～15cm程度高くする。

② 車いす座面が高いので、ベッドを車いす座面より高くすると床に足がつかない。床に足がつかないと座位移乗は難しくなるので、ベッドを下げて（車いす座面より低くなったが）床に足がつく高さにしてベッドから車いすに移乗介助した。

③ 端座位は維持できるが、円背で、端座位で後ろにひっくり返りそうな人で、体重が比較的重い（約60kg）女性を夫一人の介助で移乗したい。介助者が高齢で小柄ではあるが夫だったので、トランスファーボードによる座位移乗を勧めた。

④ 仙骨部に褥そうがあるという。座位を見たら、骨盤が起きたきれいな姿勢で座っており、臀部も肉付きがよい。ボードの差し込みなどに注意し、丁寧に移乗介助することを条件にトランスファーボードによる移乗を勧めた。

⑤ ボードをお尻の下に敷き込んだ状態で、ボードが車いす座面の対角線くらいまで到達していない。原因として考えられることには、ボードの位置が利用者の両方の臀部にかかっていることや、車いすが利用者から離れた位置に置かれていることなどが考えられる。

【設問30】座位移乗－２

座位移乗に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 車いすを便座の横に置けるようなスペースがトイレにあれば、立位がとれず、座位移動ができない人の、車いすから便座への移乗にトランスファーボードが利用できる場合が多い。

② ベッドからポータブルトイレに移乗するときにはトランスファーボードを利用すれば無理に立たせなくても移乗できるので、安全で安心である。

③ トランスファーボードで座位移乗する場合には、骨盤が前傾して体重心を前方に移動できると、移動しやすい。また、移動初期においては体重心を進行方向と逆の方向に傾け、車いす座面上に移動したら、重心を掛け替えて、進行方向に体幹を傾けると車いす座面に深く着座できる。

④ スライディングシートでベッドから車いすに介助で移乗しようとすると、車いすをベッドに対して少し斜めに配置することから、ベッドと車いすの間の隙間が越えられず、スライディングシートではベッドと車いす間の移乗はできない。

⑤ ベッドとポータブルトイレの間で、スライディングシートを利用した移乗を行うには、ポータブルトイレをベッドと平行に置き、間に隙間がおおよそ 3cm 程度以下になるようにしなければならない。

【設問31】リフト

リフトの使い方に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 床走行式リフトで人を吊り上げたときには、リフトのキャスターにかかる荷重は前方のキャスターに多くかかる。したがって、人を吊り上げた状態で移動するときには、吊り上げた人を目的の方向に移動させるようにリフトを操作すると、容易に動かすことができ、吊り上げられている人も揺れが少なくなる。

② ほとんどのリフトで、人を車いすから吊り上げるときには原則として車いすのブレーキは解除する。

③ ベッドから人を吊り上げたときには、リフトの持ち上げられる距離が十分にあれば足がベッドから浮き上がるまで持ち上げる。

④ 車いすに着座させるときには、骨盤が車いすバックサポートと平行になるように、また深く着座させるように、介助者は気をつけなければならない。

⑤ 姿勢調節型車いすに着座させるときには、バックサポートは寝かせ、座面は水平にしておくと容易に着座させられる。

【設問32】吊り具－１

吊り具に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 脚分離型といわれている吊り具は車いすに着座している状態から吊り具を装着することができ、ベッドと車いす、入浴、トイレなどでも利用することができる。

② シート型といわれている吊り具は名前の通り、１枚のシートで身体全体を包み込むように吊り上げる吊り具であり、ベッドと車いすのほか、入浴、トイレなどでも利用することができる。

③ トイレ用吊り具（ハイジーンと呼ばれることもある）はその名前の通り、トイレでのみ利用する吊り具である

④ 脚分離、シート型、トイレ用吊り具には、頭は支持しないローバック（ハーフサイズと呼ばれることもある）と、頭までカバーするハイバック（フルサイズと呼ばれることもある）とがある。

⑤ 頭を支持することができない人がローバック吊り具を利用したいときには、ヘッドサポートと呼ばれるオプションの吊り具が市販されている。

【設問33】吊り具－２

吊り具の使い方に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① ローバック吊り具をベッド上で使用するときには、吊り上げるときにベッドの背を上げることが一般的であり、車いすからベッドに戻るときもベッドの背を上げておく方が容易に介助できる。

② 畳に布団から脚分離型吊り具で吊り上げるときにはローバックタイプも利用できるが、脚分離ハイバック吊り具の４点吊りタイプを利用した方が容易に吊り上げることができる。

③ 頭の支持ができない人が脚分離型吊り具を利用する場合で、頭の支持をしっかりしたい場合にはハイバックタイプでもローバックタイプでもヘッドサポートを併用するとしっかり支持することができる。

④ トイレ用吊り具で便座に移乗する場合には、吊り上げておいてズボン・下着を着脱できるが、股関節伸展筋力が不足する場合には臀部が落下した姿勢になりやすい。このような場合には吊り具の太股にかける部分を可能な限り膝よりに設定するとお尻が落ちにくくなるとともに、ズボンなどを脱着しやすくなる。

⑤ 入浴時にはシャワーキャリー型吊り具を使用することがあるが、この座面に移乗するためにシート型吊り具を利用することが多い。その場合にはシート型吊り具を敷き込んだまま浴槽に入ることになる。

7. 入浴補助用具

【設問34】シャワーチェアとシャワーキャリー

シャワーチェアとシャワーキャリーに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（すべて正解で5点）

① 在宅では主として保管場所の問題から折り畳みができるシャワーチェアが利用されることがある。折り畳めるタイプはアームサポートがないものが多く、体幹バランスが悪い場合には利用できない。

② シャワーチェアは身体を洗うときの安定のためと浴槽に座って入るときの両方に利用されることがある。この場合には身体を洗ったあと移動させなければならないので、車輪がついているシャワーキャリーの方が使いやすい。

③ 我が国の家屋では、脱衣室までの通路が狭かったり、クランクのように曲がっていることが多い。このような場合には車いすで移動するよりはシャワーキャリーで移動した方が通過しやすいことが多い。

④ シャワーキャリーを利用すれば、脱衣室と洗い場の段差が 100mm 程度までは乗り越えることができるので、住宅改修なしでシャワー浴が可能になることが多い。

⑤ シャワーキャリーの座面とバックサポートが、たるみのあるメッシュが利用されていることがあるが、座面のたるみは座位バランスを崩しやすいので、体幹バランスが悪い人は利用できない。

【設問35】浴槽手すり

浴槽に固定する手すりに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 浴槽に固定する手すりは主として座位で浴槽をまたぐときの補助として利用される。

② 浴槽に固定する手すりには、浴槽をまたぐときにも、浴槽内において浮力を押さえるためにも、両方で使用できるタイプもある。

③ 浴槽を立位で越えるときには、壁に固定した横手すりが適していると言えるが、横手すりの場合には横向きになって浴槽をまたぐ方法になる。浴槽に固定した手すりの場合は正面を向いて浴槽を越える正面またぎが主たる浴槽への入り方になる。

④ 浴槽に固定する手すりは種類も豊富であり、どのような浴槽であっても固定することが可能である。

⑤ 浴槽に固定する手すりのうち、手すりを固定したまま浴槽のふたをすることができないタイプは介護保険を利用することができない。

【設問36】環境と動作

入浴動作と環境に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 立って歩ける人の場合には、脱衣場と洗い場の段差を安全に越えるためには必ずしも段差をなくす必要はなく、両側に縦手すりを設置して、越える方法もある。この場合の壁に固定する手すりは福祉用具レンタルで対応できる。

② 脱衣場と洗い場の段差はすのこを利用して同じ高さにする場合には、すのこはレンタル対象になる。しかし、すのこを浴室の大きさに合わせるタイプは購入品目となる。

③ 片まひの人が浴槽に入るには健側から入る方が入りやすい。同様に出るときも健側から出た方が出やすいので、浴槽から出るときには立ち上がった後、180度回転して出ることが一般的である。

④ 浴槽に入ることが不安定になってきたら、座位で浴槽をまたぐと安定する。このようなときには、浴槽の背中側の縁が座れるだけのスペースがあると浴槽に入りやすい。浴槽の横に置いたいすの場合はお尻を回転させなければならないので、浴槽の縁に座れる場合と比較して多少動作が難しくなる。

⑤ 浴槽から立ち上がるためには、足裏の基底面内に重心を移動させる必要がある。このために、壁に固定した手すりや浴槽の縁に固定した手すりを利用して体幹を足裏側に移動させる。発想を変えて、足裏を体重心の下に持ってくるという方法もあり、この場合にはプッシュアップして体幹を前に傾けるようにするとよい。

【設問37】浴槽内昇降いすとリフト

浴槽内昇降いすと浴室用リフトに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。(各1点)

① 浴槽内で立ち上がることが難しくなったら、浴槽に固定する昇降いすを使うとよい。介護保険ではレンタル対象であり、ほとんどの浴槽にも設置できるので、浴槽から出る動作はほとんど解決できる。

② 浴槽に固定する昇降いすは家族が入浴するときはじゃまになる。これがこのタイプの入浴方法の普及を妨げている主な理由である。

③ 浴槽内昇降いすを利用するときは多くの場合洗い場においたいすから横移動して浴槽内昇降いすの座面に移動する。昇降いすは浴槽の縁に置くため、高さが高くなるのが欠点であり、洗い場と浴槽の縁の高さが 300mm 程度でないと利用できない。

④ 浴槽内昇降いすはこれに座位で移動することができないと使用しにくく、介助者の負担が増加する。また、浴槽深さが浅いと肩までお湯につかれなくなる。さらに浴槽の内寸が短い(1,000mm 以下)と膝を十分に折り畳めないと利用しにくいなど、適応となるにはいくつかの条件が必要である。このようなときには浴室で利用するリフトを設置すれば多くの場合自宅で入浴することが可能となる。ただし、介助者にとって容易であるか否かは介助者の能力次第である。

⑤ バスボードで入浴することが介助者にとって大変になったら、リフトを導入することを考えた方がよい。もちろん、施設浴なども解決策の一つであることはいうまでもない。

8. 排泄

【設問38】ポータブルトイレ

ポータブルトイレの特性を表現した下記の記述のうち、適切であるものに○、適切ではないものに×を記入せよ。（すべて正解で5点）

① ポータブルトイレは本来のトイレまでの移動に転倒などのリスクが生じるような場合に利用すると便利である。

② ポータブルトイレは、座面やアームサポートの高さを調節でき、座の奥行きや座の角度を調節できるものがほとんどなので、利用者の個人的特性に合わせたトイレを実現できる。これは本来のトイレではなかなか実現できない特性である。

③ ポータブルトイレは排泄物をバケツに集めるため、本来の水洗トイレのような清潔さは実現できない。しかし、おむつなどのように、排泄物が皮膚に付着することはないので、皮膚に対する化学的危険は少なくなる。

④ ポータブルトイレは和製英語ではあるが、可搬性を表現している言葉である。したがって、持ち運びできる機能が大切であり、その重量が軽いことがまず求められる。

⑤ ポータブルトイレはバケツの容量が大きいものを選択すれば、場合によっては数回の排泄物を蓄積できるので、介助力が不足気味の場合には特に便利である。

【設問39】トイレでの排泄

トイレで排泄する場合の動作に関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① トイレのドアが内開きになっている方が片マヒの人にとっては入りやすく、入ってからドアも閉めやすいのですべての動作が自立可能な人にとっては便利である。

② トイレ内に設置されたＬ型手すりの縦手すりは主として寄りかかって衣類を着脱するときに使用する。したがって、トイレの中に入ってからの回転動作などを確認して、適切な位置になるように位置を決める。

③ 便器の正面から出入りするようなトイレは、入ってから 180 度身体を回転させなければならない。一方、便器の前方横から出入りするような配置のトイレは回転角度が小さくてすむので、片マヒなどで歩行が安定しない人にとっては安全で便利である。

④ 廊下とトイレの間にドアの四方枠分の段差がある場合には、段差をなくすとドアの下に隙間が生じる。ドアを交換すると高価なので、ドアの下部に四方枠の厚さ分を大工さんなどに依頼して追加するとよい。

⑤ 排泄後、排泄物を流すためには身体の後ろにあるノブを回さなければならない水洗タンクがある。この動作が安定してできない場合にはリモコンで洗浄するなどの解決策がある。

【設問40】尿器

尿器類に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 男性で、たたみに布団で寝ている。尿意はあるが、夜間頻尿である上に、一人ではトイレへ行くことも、ポータブルトイレを利用することもできない。このような場合、上肢機能が十分であれば、商品名「安楽尿器」のように、受尿部をペニスにあて、チューブを介してタンクに蓄尿する方式が有効である場合が多い。

② しびんや差し込み便器には男性用と女性用がある。

③ 強制集尿式尿器（電動吸引式、特殊尿器などとも呼ばれる）には受尿部がパッドになっているタイプと、カップ状であてて利用するタイプがある。パッド式は主として体動が少ない人が利用し、カップ状のタイプは歩行できるような人が利用する。

④ 男性が利用することがあるコンドームタイプの収尿器は主として機能性尿失禁の場合に利用される。

⑤ バルーンカテーテルは尿意がなく、常時失禁してしまうような人が利用すると便利である。しかし、２日に一度程度バルーンの交換が必要であり、この交換は医師や看護師しかできないため、あまり普及していない。

【設問41】おむつ・パッド

おむつやパッドに関する次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（すべて正解で5点）

① おむつやパッドには必ず吸収量が表示されている。利用するときには尿量を計測し、余裕を見て、排泄尿量の 30 ～ 50% 吸収量が多い商品を選択する。

② おむつやパッドに表示されている吸収量は、JIS や ISO で規定された計測方法によって計測して表示されているが、規格化はされていない。

③ パンツ式のおむつは高価であるため、外出時など特定の目的の時に利用される。

④ おむつとパッドをしていて、横漏れなどによって、尿が漏れ、ズボンを汚すことが多い場合には、パッドをやめて、おむつを２枚にした方がよい。

⑤ 失禁パンツとは、外見が一般的なパンツであり、内側にパッドを当てるための留め布がついている。

9. その他

【設問42】嚥下・食器・食具

食事に関連した次の記述のうち、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① ベッド上で食事をしていて、誤嚥しやすいという。ベッドの背上げ角度を最大（70 度程度）にし、枕をはずして食事をするとよい。このとき、臀部が前に移動しないように、ベッドの膝を上げておくとよい。

② 箸は使えず、スプーンなら何とか持てるという。しかし、筋力が不足して、口にスプーンを持ってくることが難しい。このようなときには前腕部を支持してバランスをとる、BFO と呼ばれる装具が利用できる場合がある。

③ 脳血管障害などにより、利き手変換をしなければならない場合には箸を利用することが難しい。このような場合にはスプーンで食物をすくうために、食器の下に滑り止めを敷くことが必要になることが多い。

④ スプーンで食物をすくうためには、食器の形状も問題になる。スープのような液体は円形の皿よりは四角い形状の皿の方がスプーンですくいやすい。

⑤ うどんなど太い麺類は健常者が利用するフォークではすくえない。一般的にはフォークに刺して食べる練習をする。

【設問43】衣類

障害を有する高齢者の衣類に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。（各1点）

① 左片マヒのひとがズボンをはくとき、左側のズボンとパンツを上げられないという。その理由の一つに、高次脳機能障害による半側空間無視の可能性がある。

② 同様な場合に、右上肢の可動域が不足し、手が届かないということが考えられる。この場合にはいすに座ってはくと解決する。トイレなどではゴムズボンにし、壁に寄りかかってはくと解決できることがある。

③ 片マヒの男性がスーツの上着を着るときには、患側上肢の袖を通してから健側上肢の袖を通す。

④ 片マヒの人は、患側のシャツのカフスボタンを留めることができない。

⑤ パンツをはきにくい時、片マヒの人はリーチャーを使うことは少ないが、リウマチの人はリーチャーを使うと上手にはけることが多い。

【設問44】

靴に関する次の記述の内、正しいものに○、間違っているものに×を記入せよ。(各1点)

① 靴の正しい履き方は、足の踵を靴の踵にぴったり合わせ(後ろに合わせる)、甲を留めて、つま先に 1cm 程度の余裕を作る。

② ヒールカウンター(踵の芯)は体幹をしっかりサポートする役割を持つ。膝がO脚になったり、X脚になったりすることを防ぐ。

③ ヒールカウンターはまた、足関節の変形を予防するという意味も持つ。車いす利用者で歩かない人であっても、ヒールカウンターがしっかりした靴を履くべきである。

④ 足がむくんでくると、足長が大きい靴を選びがちである。足長の大きな靴は歩きにくいので、足幅を合わせるという視点で選ぶべきである。

⑤ 高齢者は感染などを起こしやすいので、白癬菌の感染などのおそれがある場合には靴の中の環境が大切であり、通気性がよいものを選ぶべきである。